

2008 年度三重大学人文学部における

F D 活 動

報 告 書

2009 年(平成 21 年)3月

三重大学人文学部

I . 2008 年度FD活動の総括

本年度で6年目を迎えた人文学部のFD活動は、すでに教員活動として定着を見たといえる。本年度に実施したFD委員会の活動は以下の通りである。

本年度のFD活動の基本方針は、過去5年積み重ねられてきた基本的な活動を継承し、教員各人がFD活動の取り組みを内実化できるよう援助していくことであった。人文学部におけるFD活動は、これまでの活動により学部構成員に浸透し一定の成果を上げてきたとの判断から、本年度は活動の持続性と教員各人の自発性の醸成を重視することを目標とした。教育活動に関する教員の資質の向上には、一過性ではなく継続的な活動が何よりも必要とされ、FD活動は長期にわたって持続可能なものとして組織されなければならない。昨年度のFD活動総括でも述べられているとおり、FD活動が一定程度の定着をみaitいま、教員に与えられた「有限な時間と有限なりソース」を活用し、他の有用な活動を阻害することなく効率的に運営されることこそ、個々の教員によるFD活動の内実化を促進し、ひいては人文学部全体が提供する教育の質の向上につながるものと思われる。目指すべきはあくまで学部における教育活動の質の向上であり、いかに有用性の高い活動であっても、個々の教員が日々おこなっている研究・教育・学部運営などの活動に支障を与えるようでは、持続的な効果を期待することはできない。過密なスケジュールの中で無理に実行すれば、教員各人に一定程度の努力を求めるFD活動にあっては、負担感や他の活動を犠牲にしているとの意識をいたずらに生み、教員各人のFD活動に対する自発性を減退させるおそれがあり、有効な活動とはなりえないからである。

また、FD活動は学部のFD委員会が実施する活動だけでなく、全学的にも多くの催しがあり、現在、学内外において教員各人が教育活動の資質を向上させる機会は以前より確実に増加している。これらのFD活動から得た知識を個々の教員が内実化していくためには、教育活動に傾注する時間的余裕を確保し、それぞれの教員が個々の事情に照らしながら様々な機会から得た知識を検討し、教育の中で実践していくことが何よりも必要とされている。効率的な運営にはある程度の選択と集中が求められており、学部としておこなうFD活動の場合、教員が個々におこなう努力を援助すること、および組織としての問題点を改善することをとくに重視すね記であろう。

以上のような方針に従い、本年度のFD委員会では、定例FD研修会と学生・院生による授業アンケート、授業参観を実施した。昨年度スリム化をはかった定例FD研修会については、多くの教員から適度な頻度との評価を受けたことから、昨年同様の回数を維持して4回をおこない、そのうち1回は外部講師による講演会に当てた。実施順に挙げていくと、前年度の学生による授業評価アンケートの結果をもとに各教員が授業改善に取り組むための意見交換（6月）、大学院生および留学生に対する指導方法についての意見交換（7月）、ハラスメント問題を取り扱った講演会「ハラスメント事例に対して大学がすべきこと、できること。」（9月）、年間FD活動の評価と反省およびFD活動に関する教員アンケートの実施（12月）である。6月と12月の研修会は各学科のカリキュラム単位で実施し、7月の研修会は、初めての試みとして大学院の専修単位で開催した。

6月定例研修会で実施した「学生による授業アンケート結果に基づく授業改善の検討」

は、授業アンケートの結果をフィードバックする目的で、これまでほぼ毎年実施されてきた。アンケートは結果がフィードバックされてこそ意味を持ち、また報告者のアンケート結果を材料に議論することは他の教員の授業内容や方法、効果などを知る機会ともなり、このような研修内容はきわめて基本的なFD活動といえる。ただし、カリキュラム単位によっては人数の関係からほぼ報告者が一巡したところも出ており、今後、アンケート結果をフィードバックする方法については、もう少し工夫する余地があろう。

7月の研修会は基本的には大学院に関する研修会として実施したが、大学院生の少ない専修もあり、また院生には留学生も多いことから、留学生の指導方法についても議論の対象に加えた。大学院に関する研修会は昨年度はじめて実施され、本年度で2回目となる。初回の昨年度は問題点の掘り起こしとして学部のカリキュラム単位で実施され、初めての試みとして教員からかなりの反響を受けたが、大学院教育に関する研修会の場合、はたして学部のカリキュラム単位で集まることが適切かとの意見もあり、本年度は大学院の組織である専修別で研修会を開催することとした。大学院生は学部生以上に指導教員との直接的な結びつきが強く、日ごろ専修という単位を意識することはあまり多くないが、その一方で、院生指導は指導教員にゆだねられている部分が大きく、問題があっても他の教員と意見を交換する場はほとんど与えられていなかった。その意味では、FD研修会において昨年度に引き続き問題の共有がおこなわれたことの意義は大きかった。とはいえ、専修という単位が院生指導において実質上あまり重視されておらず、むしろ専門分野にほぼ相当する学系単位の方がよいとの意見もあった。院生指導に関する改善をおこなうためには、個々の教員の努力のみに頼るのではなく、教員間で問題を共有し、改善策を模索していく体制を作り上げることがさらに必要であろう。

9月に実施した研修会では、広島大学ハラスメント相談室准教授の北仲千里先生をお招きして、大学におけるハラスメント問題全般を扱った講演会を開催した。ハラスメント問題に関連する講演会は、FD委員会が主催したもののほか、学部長主催のものも加えると、ほぼ毎年開催されてきた。それゆえ、ハラスメントの話はすでに何度も聞いたとの印象をもつ向きもあるだろうが、ハラスメントは現在どこの大学・学部においてもよそ事ではなく、いつ当事者になるかもしれない極めて重大な問題であり、学部として常に啓発が必要とされている。講演テーマの「ハラスメントに対して大学がすべきこと、できること」は、ハラスメント問題で大学の置かれたこのような状況を総合的理解するにはまさに的を射たものといえた。講演は「架空のケース」を提示して研修会参加者全員が考える形で進めるなど、工夫されており効果的であった。ハラスメントについては今後とも講演会の開催などFD活動として継続的に取り上げていくべきであるが、しかしその一方で、外部講師を招いて開催する講演会において扱うべきテーマはハラスメント以外にも多くあり、FD委員会として年に1回開催する外部講師による講演会の内容はさらに検討していくべきであろう。内容次第では学部長との共催など、学部執行部と協議・調整していくことも講演会を充実させる一つの方法となろう。

12月定例研修会に関しては、昨年とほとんど変わっていない。カリキュラム単位で開催し、1年間の実施したFD研修会全般について意見の聴取をおこなった。なお、これらの研修会の詳細については、本報告書の定例研修会および講演会の項目をご参照いただきたい。

定例FD研修会以外の活動としては、学生・院生による授業評価アンケート、教員アンケート、授業参観をおこなった。本年度も昨年度に引き続き、学生・院生による授業評価

アンケートは全学一斉に実施されるマークシート式アンケートの一環として、また教員アンケートは学部独自のアンケートとして各学期末に実施した。どちらのアンケートも質問項目は継続性の観点から細かな語句の変更以外、昨年と同じものを用いた。各アンケートの集計については、本報告書のそれぞれの項目において詳細な分析を行っているのでご参照いただきたい。

授業参観については、昨年度と実施方法を変更した。昨年度は授業を公開する教員を募り、その後、参観者の希望を聞く方式をとったが、残念ながら希望者がなく参観が成立しなかったため、本年度はむしろ一昨年度の実施方法に戻し、全教員に対して参観したい授業の希望を聞き、希望のあった授業担当者に公開の可否を尋ねる方式をとった。昨年度の方式は、見学希望者が見たいと思う授業が必ずしも公開されていなかったり、参観可能な授業と見学希望者の空き時間が一致しなかったりと、見学希望者の意向が反映しにくい面もあったが、方式を変更することによって見学者の希望を優先することができた。その上、この方式をとると、人文学部の全教員のすべて授業が参観希望の対象となり、そのため、すべての教員は授業公開への心構えをある程度持つようになるという効果もあった。本年度においては件数こそ少ないものの、授業参観を実施することができ、授業参観が成立しなかった一昨年度および昨年度よりも前進したといえる。授業見学者・公開者にはアンケートを実施しており、その結果は来年度に実施する際には孫功となろう。

以上、反省すべき点も多いFD活動であったが、人文学部におけるFD活動はすでに人文学部内の活動に組み込まれている。今後はこの定着した活動をいかにマンネリ化させず継続していくかが課題となるが、それには時間的制約のなかでの的を絞った効率的運営や、研修内容の企画に対する一層の工夫などが求められている。

2009年3月 人文学部FD委員長 森脇由美子